

日本の古都の顕著な普遍的価値発掘の可能性 — 鎌倉を事例に —

古館 一弘[†]

Potentiality for the Outstanding Universal Value in Japanese Old Cities: a case of Kamakura

Kazuhiro Furudate

1. 序論

1.1 はじめに

当研究は、日本における古都を、世界遺産の「顕著な普遍的価値」(Outstanding Universal Value。以下「OUV」という。)の視点で再評価し、今後のまちづくりにつなげていくものである。その事例として、日本三大古都の一つである鎌倉を取り上げることとする。

日本の古都では近年、インバウンド需要の高まりとともに、世界的な観光圧力が高まっている。それに対して、国際的な保護も同時に必要であり、その保護の手法の一つに世界遺産スキームがある。ナショナル・トラスト等、文化財の保護を主とする取組と異なり、長期安定的な認知度を高めつつ、観光圧力をコントロールするようなスキーム(ヘリテージ・マネジメント)は、従前から比較的認知度の高く、訪問客数の急増が起りにい古都で効果的に機能する。その古都の一つである鎌倉も、狭い都市空間の中に数多くの歴史的建造物を抱え、観光公害が深刻化している。災害リスクも高い中で、鎌倉の文化財を保護し活用する方法を、世界遺産スキームで考えることが喫緊の課題となっている。

1.2 世界遺産とは

世界遺産スキームとは、世界遺産条約の加盟国が、世界遺産委員会を運営し、諮問機関ICOMOSの審査を受けて、委員会の決議で登録を行っていく仕組みである。それにより登録された不動産を世界遺産と呼んでおり、その価値の性質から文化遺産と自然遺産に分かれている[1]。登録条件は、不動産であること、OUVを満たしていること、文化遺産は表1の(i)~(vi)いずれかの評価基準とその真正性及び完全性を満たしていること等である。

OUVとは、「数ある同種の遺産を代表すること(代表性)」と「類例のない唯一無二の性質を持つこと(希少

性)」とが稀に見る状態で組み合わせられている価値であり、国家間の境界を超越し、人類全体にとって現代及び将来世代に共通した重要性を持つような、傑出した文化的な意義をもつとされる[2]。また、真正性とは、文化遺産の形状、材料、材質などがオリジナルな状態を維持している性質であり、完全性とは、文化遺産とそれらの特質のすべてが無傷で包含されている性質である[3]。

世界遺産スキームは絶対的な価値があつて国際的な保護を行うものでなく、価値を認知し国際機関の監督下に置くものであり、あくまで文化財保護のために利用できるツールの一つに過ぎない。そもそも世界遺産という概念は、普遍主義と理想主義に基づく「理念」と、政治と密接に連動した国際条約という「制度」から成り立っている[4]。制度的な見地からブランド性を維持するための総数抑制策が図られ、理念的な見地から世界遺産の基準・規模ともに今後ますます拡充させるため、戦略的に分野・地域等を絞って優先的に登録を行うグローバルストラテジーや、新しい種類の評価手法等を研究し優先的に登録を行うテーマ別研究等が試みられている。世界遺産スキームは普遍的価値を模索する手段に過ぎず、真正性はあらかじめ存在するものではなく見出すもので、完全性は調整可能で、「価値基準」に基づく説明は誰もがわかりやすいものとなる[5]。

表1 世界文化遺産の評価基準 [2]

i	人間の創造的才能を表す傑作である。
ii	ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展における人類の価値の重要な交流を示していること。
iii	現存する、あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。

[†]2022年度修了(社会経営科学プログラム)

iv	人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体または景観に関する優れた見本であること。
v	ある文化（または複数の文化）を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地・海洋利用、あるいは人類と環境の相互作用を示す優れた例であること。
vi	顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または明白な関連があること。

1.3 鎌倉と世界遺産

文化遺産としての鎌倉の価値は、無形のものが多く占める。

まず、武家文化であり、これは主従関係に基づく倫理等の独特な作法等が発達し、文化財等に象徴する形で影響を残したものである。例えば鶴岡八幡宮は、武家の精神的な核として信仰され続け、相撲や流鏑馬・競馬などの武芸が奉納され、元旦の参拝である初詣を始めとする武家の年中行事を形成し、時の武家の為政者により修復された[6]。尾根を切断して鎌倉への流入路を開いた「切通し」や、軍事的最終防衛線となった若宮大路の段葛等も残されている。また、鎌倉は京都の伝統的な文化システムを攪拌し、破壊し、再構成させる場となり[7]、新仏教の興隆や京経済の復興とともに、武家文化を根付かせていった。

次に南宋文化であり、これは地中から出土する銅銭やかかわらけ、仏教書籍といったものの存在等から、鎌倉の交易拠点としての重要性を示すものである。ただし、その名残を残す不動産はほとんど残っておらず、日本最古の港跡とされる和賀江島や、中国の仏典等を蒐集した金沢文庫等に限られる。

そして仏教文化であり、これは鎌倉独自で発達した仏教の世界宗教史上の希少性と、鎌倉が果たした日本文化史上の象徴性を表すものである。平安時代の貴族階級の私的な来世救済の信仰や特定の者を神格化し鎮魂をおこなう怨霊信仰に対し、真言律宗、日蓮宗等の自立を尊ぶ信仰や、政治改革を求める信仰、敵味方関係なく戦死者の冥福を祈る敵味方供養が行われた。特に、それまで最澄や栄西らによりもたらされた兼修禅に対し、修行により直観的に悟りを得ることを目指した専修禅は、経典やその注釈書の理解を必要とせず、精神修養の面でも惹きつけられるものがあり、武士に広く受け入れられた。中国から避難してきた禅僧を次々と招き、専修道場を設け、門下からは多くの禅僧が育っていったことで、その後の禅寺が禅宗を介して大陸の文化を普及し、様々な日本の伝統文化のパトロンとなる基礎を築くこととなった。比較的有形的に残るものが多く、伽藍配置では、谷戸の地形の軸線に個々の建築が整然と配置された建長寺の例や、斜面になっている谷戸を四段に建造し、其々のレベルに建つ建物の屋根の連なりによっ

て特徴ある景観が生み出された円覚寺の例など[8]、建築では円覚寺の舍利殿に認められる禅宗様など、庭園では伽藍最奥部に池を作り禅機を表現した瑞泉寺の例などが挙げられる。また、鎌倉の狭い土地柄に合わせ、谷奥に寺院を建て、近くの修行の場とされていた岩窟に中国禅僧が、「やぐら」と称される横穴墓を導入した。

これらの文化的価値を持つ鎌倉は、1992年の世界遺産条約加盟時より暫定候補リストに掲載されていた。鎌倉の半官半民組織や文化人コミュニティによって世界遺産招致運動が行われる中、市による文化財指定追加や推薦案作成の準備が進められ、2012年に登録申請を行ったものの、ICOMOSから不登録勧告を受けた[9]。その後、勧告内容の検証・調査研究が行われ、鎌倉独特の葬送施設である「やぐら」に関しては、「起源を中国の類似する遺構に見いだせる可能性が高まった」とし、一定の成果を得たとしたものの[10]、その立証に多大な時間がかかるとして、登録運動を休止した。

不登録勧告の原因として、市民の世界遺産への考え方の理解不足や登録数抑制による厳格審査等の背景があったものの、何よりOUVを明確に示せなかったことが大きい。推薦時のコンセプトは、武家がはじめてつくった政権都市、武家独自の政権機構や法整備が進展したこと等とし、2009年の国際専門家会議で、特に評価指標の(iii)と(iv)について強調すべきとの助言を得て、推薦に至ったものの、2013年5月1日に報道発表された「イコモスの評価結果及び勧告の概要」[11]によれば、主に表2のとおり指摘がなされている。

世界遺産スキームは、先述のとおり保護を行うためのわかりやすいストーリー性を求める傾向にあり、焦点を絞った上で鎌倉のOUVを世界遺産スキームに沿って改めて提示するとすればどのようなストーリー等の再構成が必要なのかを検討することが重要となる。この研究では、リサーチ・クエスチョン(RQ)として「鎌倉のOUVはどのようなストーリー等によって再構成できるのか」を取り上げることとしたい。次章以降では、ストーリー等を検討する上で、国内・海外の文化遺産について、先述の世界遺産スキームの考え方に沿って、構成資産、完全性、真正性、世界遺産の評価基準といったものを軸に比較を行い、遺産の内容と構成といった総合的な視点から、鎌倉のOUVの潜在性を検証する。

なお、関連する先行研究としては、世界遺産スキームの考え方や認定プロセス(世界遺産運動等)の研究は多いものの、各遺産の評価基準等を比較分析し、ストーリー等を再構成する研究は少なく、鎌倉に至ってはほとんど存在しない。例えば立原[12]は、鎌倉時代の遺産がほとんど消失して存在していない点について軽く触れているが、京都の世界遺産の主要な構成資産(本堂等)の再建年代がほとんど近世以降となっている点に触れておらず、分析が不足している。また、高木[13]、亀井[14]、五味[15]らは、鎌倉の防衛機能を押し出すコンセプトについて疑問を呈し、要害

施設が現在も真正性を持って残っているか、他の世界遺産と比べてOUVを持っているかについて立証しきれないとしているが、代替案は示されていない。伊藤[16]も、石見銀山と比較分析を行い、鎌倉は生活様式等がほとんど残っておらず、基準(v)の「自然との共生」の評価は難しいとしているものの、同様に代替案は示されていない。

一方で辻[17]は、平泉を例として鎌倉の登録戦略の分析を行い、構成資産の中には仏教に関わる寺社が多く、すでに認められている武家の精神的・文化的な特徴と仏教の寺社を包括できるストーリー（「鎌倉文化—武家政権と仏教の融合」等）を創出し、浄土思想の影響を受けた鎌倉仏教を色濃く反映したこと、室町時代に花開く公家文化・武家文化が融合した室町文化に影響を与えたことを基に、基準(ii)を打ち出すべきとしている。登録内容が広範にわたり、鎌倉が浄土思想のみに強く影響を受けたというのは短絡的で、分析が不足しているものの、世界遺産スキームの考え方に沿い、ストーリー等を再構成する点で、本研究への示唆に富んだものである。

表2 イコモスの評価結果及び勧告の概要 [11]

完全性	社寺や切通を除いて物証として十分に満たされていないが、当該資産で提案されているOUVが証明されていない（真正性の条件は満たされている）。
基準(iii)	構成資産では精神的、文化的な側面については示されているものの、それ以外の要素については物的証拠が少ないか（史跡、防御的要素）、顕著さにおいて限定的なものか（武家館跡、港跡）、あるいはほとんど証拠がないもの（市街地、権力の証拠、生活の様子）。
基準(iv)	武家が鎌倉の地を選び、自然への働きかけによって防御性を高めたことは認められるが、それは鎌倉の価値の防御的側面を示すのみ（切通等）であり、それだけではOUVを有するとは言えない。一方で、社寺や庭園の景観は重要であるが、武家発祥の地としての国レベルの重要性のみが示されており、比較検討の観点からOUVについては証明されていない。
総評	現在の構成資産では、主張する価値のうち武家の精神的な側面は示されているが、防御的側面については部分的にのみ示されており、さらにその他の視点（都市計画、経済活動、人々の暮らし）についての証拠がかけられているという完全性の視点及び比較検討の観点から、OUVを証明できていない。

2. 日本の古都比較

2.1 はじめに

本章では、鎌倉と同様の日本の古都の歴史的価値を検証・比較するものとする。今回、古都を比較対象とするのは、類まれな歴史的価値のある文化財が集積し、それにより独特の風致を保っている点で鎌倉と似通っているためである。本章では、日本の古都として、三大古都と呼ばれる

京都、奈良、鎌倉、それ以外に古都と認識されうる地域を取り上げる。

2.2 京都

京都は千年の都というように長い歴史を持つ。それゆえ、常に日本の歴史の中心にあったといっても過言ではなく、日本を代表する文化に恵まれ、1994年に世界遺産登録された。

推薦書を見ると、登録理由としては、「古都京都を特徴づける歴史的記念物であり、地域的にも時代的にも古都京都を説明するに足る文化資産群」とされており、特徴的なワードとしては、「日本化した都城の集大成」、祭りや茶の湯・立花等の伝統文化として市民の生活や精神の中に資産が活用され生き続けている「名実ともに日本の伝統的文化の中心地」、「木造建築を主体とする歴史的都市の中で、1,200年にわたり一国の文化の中心として機能しつづけている都市」というものが挙げられている[13]。一方、評価基準としては、(ii)と(iv)となっており、かならずしも都市の貴重性・唯一性が評価されたとは言えない。推薦時には、(iii)（造られた各時代の精神を反映）、(vi)（日本の宗教文化の形成に大きな影響を与えた宗教都市）も示されたが、適用されなかった点を見ると、見えない価値を示すことの難しさが現れている。

その構成資産は、再建年代が主に16世紀末以降のものとなっている一方、創建年代のものがそれぞれの時代（建築様式・建築史・造園史等）を特徴付けるものであり、「伝統的建築様式を用いて再興された」ものとしている。歴史別にみると、平安京造営当初を知る資産として下鴨神社等、平安時代前期を代表する資産として仁和寺等、浄土思想が文化的に完成されたものとして平等院等、鎌倉時代を代表する資産として高山寺、禅宗寺院の代表例として天竜寺等、北山・東山文化の代表として鹿苑寺等、枯山水庭園の代表として龍安寺、桃山文化を代表する資産として二条城等、と、代表的で真正性を持つものが散りばめられている。性質別にみると、建築・庭園の一体性を謳うもの（西芳寺等）、禅宗伽藍・庭園の一体性を謳うもの（天竜寺）、主に庭園の独自性を謳うもの（龍安寺等）、主に建築の独自性を謳うもの（西本願寺等）、と分類することができる。天竜寺等は、鎌倉における建長寺、円覚寺、寿福寺等に対し、伽藍配置等の違いを示す比較対象として有用であると考えられる。

真正性については、平面・構造・内外の立面意匠が創建当時のままであること、取替を前提とした材木選びを行っていること、柱・梁による軸組構造や継手・仕口によるジョイント構法であることが強調されている。16世紀以降の他の建造物の移築遺構（醍醐寺等）も評価対象となっていることから、移築自体は評価時点が明確にされていれば真正性に影響はないと思われ、円覚寺・建長寺・鶴岡八幡宮等も近世移築の説明を十分に果たすことで真正性は保たれると考えられる。一方で、推薦書で庭園も含めた主要平面

図をつけているのが西芳寺、鹿苑寺、慈照寺、龍安寺のみであることから、庭園も著名な天龍寺、醍醐寺、西本願寺等は庭園の評価が難しく、基本的には建築メインで評価されている可能性もある。その点、瑞泉寺等のやぐらをメインとするものは真正性を示しやすいものの、建長寺の庭園については、復元されたものは従来の位置からずれており、意匠等も変わっていると考えられるため、禅宗庭園の復元物を押し出すのは難しいと考えられる。

なお、推薦書には市民による文化財保護の姿勢を評価する記載も見られる。応仁の乱後の京都の復興は、経済力を高めていた町衆の手によるものであり、江戸時代の寺請制度で役割を増した全国の寺院の本山の集中する中で民衆に宗教活動が溶け込んでいき、祭りや茶の湯、立花等の伝統文化が盛んに行われ、市民の生活や精神の中に資産が活用され文化として生き続けている点が評価されているのだと考えられる。

2.3 奈良

奈良は、日本の旧国名の倭（やまと）が大和（やまと）国として使われ、まほろば（素晴らしい場所）の地と言われるほど、悠久の歴史を誇っている。県内にすでに3つも世界遺産があり、どこを掘っても文化財が出てくるほど、文化資産に溢れた場所である。ここでは、行政の中心地として、1998年に「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録された平城（現在の奈良市付近）に焦点を当てることとする。

評価基準は、(ii), (iii), (iv), (vi)となっており、日本の世界遺産の中で唯一、都市計画（条坊制）が評価対象になっており、春日山は数少ない文化的景観の登録事例である。平城宮は約74年間と存続期間がきわめて限定されていたことや中世以降の奈良の町が平城宮の位置から遠く離れた平城京の東縁部分で発展・拡張したことから、都市開発による歴史的な変容を受けることがなく、地下遺構、土器、瓦、木簡などが良好な状態で保存され、真正性を保つこととなった。

推薦書[19]では、構成資産は、8世紀の日本および現在に至る奈良を説明する上で不可欠の代表的な文化資産群とされている。歴史上の奈良の意義について、中国・唐に学んだ法律制度をもとに、国家の仕組みが整った奈良時代の中心地であり、壮大な伽藍は、一貫した仏教興隆政策がとられた奈良時代の文化の到達点を示すものだったとしている。平城宮跡は「日本を含めた東アジア地域における古代都城制を伝える貴重な考古学的遺跡」として取り上げられている。東大寺南大門の大仏様、正倉院の校倉造、といったものが、建築史上で各地の建築に及ぼした影響にも言及されている。なお、日本初のシリアル・ノミネートによる登録であり、奈良時代の平城京を構成する真正性のある重要な社寺等のみが登録され、西大寺等はあえて省かれている。平城宮跡、春日山原始林を除き、すべて寺院の伽藍・建造物のみの登録となっており、京都に比べ庭園が少ない

ものの、平城宮跡の庭園は、日本庭園の過渡期を示すものとして重要度が高い。

真正性については、京都と同じく、意匠、材料、技術に関する日本独自の考え方が強調されている。また、市民による文化財保護の姿勢を示す文があり、「神道や仏教をはじめとする宗教儀礼や行事が盛んに行われ、市民の生活や精神の中に資産が活用され、文化として生き続けている」としている。実際に各社寺は朝廷や武家等の信仰を集め、寄進や修復が行われ、奈良公園では春日大社の神の使いとして鹿が放し飼いにされている。

なお、奈良の著名度について、「国内の歴史の教科書には必ず登場し、年間約160万人の修学旅行生が全国から訪れている。また、国内有数の観光都市であり、年間約1400万人の観光客がある。そのうち約22万人は外国人観光客であり、海外においても、日本を代表する歴史文化都市として広く知られている。」と記載され、世界遺産の代表性に配慮されたと考えられる。

2.4 平泉

京都、奈良の他にも、古都と呼ばれうる場所、または武家の街としての影響が色濃く残る場所はいくつかある。中世に社寺町・港町であった場所、近世に武家町・城下町であった場所に大別できるが、このうち鎌倉と合わせ、①中世において広域行政の中心施設があり、②交易都市としても栄えており、③関係文化財が多く存在し、④世界遺産リストに記載されたという条件を満たす都市として、平泉を取り上げる。

平泉は、鎌倉と同じく平安時代末期に誕生した地方軍事情権の拠点であり、浄土信仰を極め、経済的にも栄華を極めた。2011年に世界遺産登録されている。

構成資産は、寺社4、山1の5点となっており（6184ha）、「古都奈良の文化財」（2579.5ha）が寺社6、その他2、の8点であったことから、数ある程度絞っている事が考えられ、逆に寺社等17、山5である鎌倉（2043.2ha）は、多すぎる印象である。

評価基準は浄土思想を顕著に表したのものとして(ii)と(vi)となっている。この点鎌倉も同じく禅宗伽藍の様式が京の各禅寺にも影響を与えていることが見受けられ、同じく(ii), (iv)を適用することも検討の余地があると考えられる。また、災害や戦乱の影響を大きく受けておらず、真正性も十分保たれたものとなっており、鎌倉が度々戦乱に巻き込まれ、また災害にもしばしば遭っているのとは対照的である。

推薦書[19]では、資産の形態・性質から見た歴史が、行政拠点・仏教拠点の2つの面で詳細に記載されている。行政拠点の面では、東を東稲山及び北上川、西をなだらかに連続する丘陵、北を衣川、南を太田川に臨む風光明媚で水の豊かな自然の地形・環境とも融合しつつ、仏教に基づく理想世界の実現を目指して造営されたとしている。仏教拠点の面では、日本古来の自然崇拜思想とも融合しつつ、法

華経、密教、浄土教など多様な要素を包括・統合し、独特の性質を持つものへと展開を遂げた浄土思想が現れているという。この点、鎌倉の周囲を囲む山々については、防衛的な意味しかなく、その物証も少ないため、山を構成資産に含めることの困難さが伺える。

2.5 まとめ

国内比較においては、鎌倉の価値の独自性にも注目したが、武家文化以外の点においても十分独自性が示せるものがあるとわかった。

まず評価基準について、京都・奈良・平泉に共通して(ii)と(iv)が採用されているが、鎌倉は前回の推薦では、独自性を出すために武家文化を全面に押し出し、基準(iii)と(iv)で勝負し、物証不足で評価されなかった。ここで、逆説的に今示せる物証で勝負することを考慮すると、3者にも共通した基準(ii)と(iv)の信仰という軸のみでストーリー化して勝負することも十分可能であると考えられ、特に禅宗文化については、世界的に継承した点や後の日本の伝統文化に多大な影響を与えた点でOUVを持ち、3者との差別化も十分に図ることができると考えられる。その付随的な価値として、武家とそのパトロンとなって影響を与えてきたことも示せると考えられる。

構成資産について、鎌倉は京都などに比べると、国指定史跡・財が比較的少ないといえる。建築については、鎌倉は鎌倉時代ということが注目されがちであり、単純に建築推定年代で考えると室町・江戸のものが多いが、それは京都の構成資産も同様である。庭園についても、改変されているものが多いものの、瑞泉寺等の切岸を活用した庭園は独特のものであり、埋蔵庭園史跡にも潜在性が秘められている。真正性の観点から、京都や斑鳩のように、単独の建築物や庭園で勝負するのは難しいと考えられ、平城や平泉等のように構成資産の数を絞りつつ関連性を高め、ストーリーの統一性を高めるべきであると考えられる。

その他、都市計画について、京都や奈良の古代の都がいずれも大陸の都城にならって内陸の平野部に造られたのに対して、鎌倉の場合は山々に囲まれ、海に面した谷戸に造られており、規模こそ小さいものの、それだけに全体がコンパクトで有機的な関係性を持った都市であった[4]。資産のインパクトという面では、その歴史からしても奈良・京都にどうしても見劣りしてしまう部分があるものの、平泉のように、逆に地誌的にも歴史的にもコンパクトにまとまって存在していた点が、鎌倉の独自性の一側面であると考えられる。一方で、保全・管理については他の都市と比較して一長一短があり、交通(渋滞)問題は、内鎌倉が閉じた構造からロード・プライシングの効果が高いと考えられる一方、海に面していることから、津波や大潮の被害に遭いやすいことも考えられる。

表3 各世界遺産とその評価基準 [1][18][19]

鎌倉	iii	武家政権発足の地、武家文化創出を表す証拠として、①世襲制による職業的戦士階級を出自とする武家集団による支配、②禅宗寺院などの中国文化との交流・摂取、③茶・禅などの文化的伝統の醸成。
	iv	山稜部と一体となった稀に見る政権所在地の類型として、①三方を山に囲まれ、一方が海に開く要害の地、②切通、やぐら等独特な土木的施工による造成の痕跡、③神社・居館等の機能的配置。
京都	ii	京都は日本の文化的伝統の創出において決定的な役割を果たし、特に庭園の場合において、それは19世紀以降世界の他の地域において意義深い影響を与えた。
	iv	京都の現存文化財における建築と庭園設計の集積は前近代における日本の物質文化のこの側面に関する最高の表現である。
奈良	ii	これらの建築群は、8世紀の日本の木造建築技術が高度な文化的・芸術的水準を持っていたことを示し、中国や朝鮮との密接な文化交流を例証するものである。
	iii	日本の代表的な古代都城を構成する資産群であり、とりわけ平城宮跡は失われた古代宮都の考古学的遺跡として貴重な事例である。
	iv	古代の律令制拡充期における寺院の威容を伝える建築アンサンブルで、日本の古い形態の寺院建築を知る上で重要な見本である。
平泉	vi	神道や仏教など日本の宗教的空間の特質を現す顕著な事例である。
	ii	仏教思想や庭園造りといった外来の概念が、神道を含む日本固有の習俗や自然観と結びつき、独自の建築様式の発展へとつながった。
トマール	vi	仏教が普及する過程での地域的受容の一形態の例証となっている。
	i	テンプレルの初期の教会は、ルネサンス建築と融合し、人類の創造的資質を示している。
ロードス	vi	トマールのテンプレル騎士団はもともとレコンキスタの象徴であったが、ポルトガルの大航海時代のシンボルとなった。
	ii	長い間難攻不落と考えられてきた「フランクの」町ロードスの要塞は、中世の終わりに東地中海盆地全体に影響を及ぼした。
	iv	包囲に対する恐怖の中で、十字軍の間に設立された軍・病院秩序が東地中海地域で生き残った歴史の重要な期間を示す建築群の顕著な例。
	v	フランク様式とオスマン様式の建物を持つロードスの旧市街は、連続的かつ複雑な文化変容現象を特徴とする、伝統的な人間の居住地の重要な集合体である。

ヴァレッタ	i	この都市は、新プラトニックの原則に触発された統一された都市計画、自然の場所をモデルにした要塞化された要塞の壁、そして適切に選択された場所への偉大なモニュメントの自発的な移転による、後期ルネサンスの傑出した理想的な創造物。
	vi	近代ヨーロッパの最大の軍事力と道徳力の歴史と関係している。
ブルガール	ii	地域の文化的伝統と支配者の交換と再統合を示しており、建築、都市計画、景観設計への影響が表れている。
	vi	タタール人イスラム教徒、およびユーラシアのより広い地域の他のイスラム教徒グループにとって、地域的な基準点であり続けている。
コンヴォ	ii	東方正教会のビザンチン様式とカトリックのロマネスク様式との融合である、独特のバルカン半島の旧ルネサンス様式の建築様式を反映している。
	iii	3つの教会の壁画は、ビザンチウムの旧ルネサンス期の文化的伝統の例外的な事例となっている。
	iv	3つの教会は、バルカン半島のパレオロジアン・ルネサンス様式の建築と壁画の装飾の発展を繁栄しており、教会と国家の力を合わせたセルビアの強いアイデンティティを形成するために利用された歴史の重要な段階を反映している。
高山	iii	天地の中心という天文学的な思想は、華夷秩序の思想、天地の中心に首都を設置することの吉祥、そしてその自然の属性である高山とそれに関連する儀式と強く結びついている。
	vi	登封地域における神聖な建造物と民俗的な建造物の集中は、1500年以上にわたって皇帝の信仰と支援を得て、中国人にとって重要である神聖な山となり、天地の中心として強力に永続的な伝統を反映している。

3. 世界の古都比較

3.1 はじめに

世界の古都との比較においては、構成資産の性質から、①戦士階級による文化、②中世古都、③禅宗文化、の観点に大別して比較することとしたい。

3.2 戦士階級の文化の観点

戦士階級と言うと、武士や騎士の他、ヴァイキング、マオリ、ブルー、スー、クシャトリヤ、マムルーク等が挙

げられる。ここでは、①階級化されて一定程度その地域の文化の担い手となっているもの、②武家の歴史の変遷と似ているものを取り上げることとする。武家は戦士階級の存在した時期が世界史上見ても稀に見る長さであったが、同じく長期間戦士階級として存在し続けたのが中世騎士であり、ここでは、中世欧州を取り上げることとする。

中世騎士の遺構は数多く存在し、特にその影響が強いマルボルク、アッコ等が世界遺産となっており、暫定リストにもクラック・デ・シュヴァリエ等が掲載されて、その多くは城塞となっている。そのうち比較対象としては、古都となっているロドス・ヴァレッタ、戦士階級に信仰され続けたトマールを取り上げることとしたい。

トマールは、ポルトガル中部の都市で、レコンキスタ後の1147年にテンプル騎士団に土地が与えられたことから、騎士の古都としての歴史が始まる。テンプル騎士団はキリスト教修道院を建設し、大航海時代のポルトガルを支えたが、その修道院が1983年に登録された。その建築の特徴は、ロマネスク・ルネサンス式等、様々な建築様式が融合していることであり、騎士の影響を受けた建造物も存在する。修道院は城塞化され、騎士によって円堂が導入されたことも判明している。評価基準は、(i)、(vi)で、その創造的価値とともに、レコンキスタと大航海時代の象徴としての価値が評価されている。この点、基準(vi)の採用は時代の趨勢を決めた戦士階級を評価したとも受け止めることができる。

ロドスは、14世紀から16世紀まで聖ヨハネ騎士団が街を城塞化し、16世紀にオスマン帝国により無血開城された後もその影響が残っており、1988年に登録された。構成資産は宗教施設のみならず町並みも入っており、評価基準は(ii)、(iv)、(v)となっている。難攻不落であったことによる歴史的重要性、包囲時にも軍事・衛生秩序が整っていた点、平時にもゴシック時代の美しい建築があり、フランク様式・オスマン様式の融合した建築があった点、が評価理由である。

ヴァレッタはマルタ共和国の首都であり、ロドスから撤退した聖ヨハネ騎士団が16世紀に建設した都市として、1980年に登録された。構成資産は宗教施設のみならず町並みも入っており、評価基準は(i)、(vi)となっている。都市計画と後期ルネサンスの建造物の素晴らしさ、2世紀半にわたって維持したエルサレムの聖ヨハネ騎士団の歴史と重要な関係にある点が評価理由となっている。構成資産には騎士団宿舎などの戦士階級の建造物が入っており、そうしたものが地上に残っていない鎌倉とは異なった点である。

これらの遺産から、戦士階級の歴史な重要性を評価基準に入れる場合は基準(vi)を用いることが妥当であることが窺えるが、鎌倉が戦士文化の観点で基準(vi)を満たすのは難しいと考えられる。鎌倉においては、上記の遺産ほど明確な城壁等の人工物や町並みは現存しておらず、段葛・切通し等の土木工事跡に限られており、防衛機能で決定的な役割を果たした真正性を示すのが困難である。遺構や自然

の構築物での登録はほとんど前例がなく、登録規模としても、城郭や町並みのように規模の大きい人工物ではないことから、今後グローバル・ストラテジーのテーマ別研究において、戦士文化に関する遺産の類型を創設した方が賢明である。

または、別のストーリーで付随的な要素として加えることも考えられる。例えば、騎士の教会信仰、中国・宋の士大夫の禅宗寺院信仰、鎌倉武士の八幡宮や禅宗寺院信仰のように、戦士階級からの信仰を集めたことで、その宗教施設の特異性を補強するといった説明の方が説得力を持つ。

3.3 中世古都の観点

「古都」といっても、認識する対象や栄えた時代、評価される対象によってその捉え方は変わってくる。例えば認識する対象が、宗教者であれば巡礼地であることが考えられ、戦士の末裔であれば先祖やその戦士階級の存在を偲ぶ場であることが考えられる。栄えた時代については、中東では古代、欧州では中世、アジア・中南米の元植民地であった地域は近代に近い時期に繁栄している古都が比較的多い。評価される対象については、世界では「都」市が「壁に囲まれた場所」であるという印象が強いためか、「古都」という邦訳がよくあてがわれる「historic centre」の多くは町並み全体が評価対象となっている一方、近世の町家や古い町並みが存在する京都は、英語の遺産名「historic monuments」として古い町並みが構成資産となっていない。このことから、鎌倉の性質に合わせて、古都の対象を絞ることとしたい。

鎌倉の満たす資産構成や時代背景等の条件として、①資産の構成が宗教施設群のみであること（町並みが評価されたわけではないこと）、②登録国がすでに多くの世界遺産を抱えていること（グローバル・ストラテジーの影響から外れていること）、③世界史上においてその土地にそこまで大きな意義があったわけではないこと、④中世に繁栄した後寂びたこと、が挙げられるが、それをすべて満たす世界遺産は存在しないため、いくつかの条件を外すこととする。

まず、鎌倉が「ZEN」の文化を絶やさず継承したことや「SAMURAI」として知られる武家の文化を築いた端緒となったことで世界史上大きな意義があったと仮定し、同じく世界史上の重要性等を踏まえ、2014年に宗教施設群が登録されたロシアのブルガールを取り上げる。ブルガールはかつて13世紀までヴォルガ・ブルガール王国の首都となっていたが、モンゴル侵攻によりカザン・ハン国、その後ロシアに編入され、弱体化していった都市である。主な構成資産はカテドラル・モスク、東の霊廟（聖ニコラオス聖堂）等の巡礼関連施設となっている。町並みの真正性は評価されず、当時ロシアはすでに多くの世界遺産（25件）を抱えており、当地は世界史上で認知度が高いとまでは言えず、イコモスから一度不登録勧告を受けている点で、鎌倉の状況と酷似している。評価基準は(ii), (vi)であり、地域

の諸伝統の文化的交流を例証していること、タタールのムスリムたちにとっての精神的な拠り所であること、が評価理由となっている。同遺産は、鎌倉と同じく精神的な要素が強いものとなっており、考古学的な物質的価値については、少なくとも世界遺産委員会では否決されている。それでありながら不動産の真正性が重視される世界遺産において評価されたのは、最北のムスリムの巡礼地であったという文化的重要性が大きいと考えられる。この点、鎌倉は臨済宗徒にとって修行場ではあったものの、巡礼地や偲ぶ場所である点までは言いきれない点で異なる。

次に、日本はすでに多くの世界遺産を抱えているが、登録抑制の影響がないと仮定し、同じく登録数の少ない地域として2004年にセルビア正教会の4つの教会堂や修道院が登録されたコソボ（世界遺産条約上はセルビア）を取り上げる。シリアル・ノミネートであり、世界史上の認知度は低く、オスマン帝国（イスラム教）の影響を受けたこともあり中世後期から町が廃れていった点で、鎌倉に少し状況に近い。評価基準は(ii), (iii), (iv)であり、14世紀から16世紀にかけてバルカン半島の教会建築と壁画の発展に決定的な役割を果たした点、東方正教会のピザンチン様式とカトリックのロマネスク様式との融合である独特の旧ルネサンス様式の建築様式をもっている点、壁画の14世紀前半以降のバルカン芸術の発展の高さ、セルビアの国家形成に重要な段階を果たしている点が価値として挙げられている。この点鎌倉は、建築様式や伽藍配置において、南宋文化と従来の文化・地域特性の混淆を示唆していると考えられ、禅宗の普及に決定的役割を果たしている点も類似している。一方でコソボにも14世紀以前は戦士階級も存在していたものの、セルビア人の独立のシンボルとしての古都であり、教会等はセルビア人の統合の象徴である点で、武家や禅宗徒にとってのシンボルとして偲ばれていた古都に過ぎない鎌倉とは異なっている。

以上より、古都の観点でストーリーを構築した場合、鎌倉は信仰者や戦士階級の精神的な象徴である以上のものではなく、それだけをもってOUVがあると言い切ることが難しいと考えられ、むしろ別のストーリーで付随的な要素として加えることが妥当であると考えられる。例えば、禅宗継承の地であり、武家のシンボルの地として偲ばれていた、等が考えられる。

3.4 禅宗文化の観点

禅宗は、ブツダが禅定によって悟りを開いたことに続き、中国・南北朝時代以降に菩薩達磨の児孫によって民族性に由来する独自の発想（禅問答、頓悟思想等）を取り入れて禅宗として組織化し直され、唐代に最も中国的な仏教となったと言われている[20]。日本においては、平安時代以前に兼修禅として受け入れられたが、鎌倉時代になると、武士階級を中心に専修禅が定着していった。一方、明・清では禅宗を始めどの仏教の宗派においても、次第に目立った活動が行われなくなっていく。武家階級に広ま

った要因として、野人的な唐朝禪から国家的な宋朝禪への禪宗自体の性格の変化、内面の「悟り」の境地の獲得・吟味・価値の強調への集中である公案禪が明快で効果的に現世体験を得させることができたこと、禪宗の行動性によって戦闘という武士たちの生業を正当化したこと、武士たちが朝廷の貴族たちの誇る文化的伝統に対抗する意図で積極的に受け入れたこと、元寇という偶発的な出来事（渡来僧の増加等）が考えられている。その能動的な性格により、武士道等の哲学、五山文学等の文学、水墨画や庭園等の美術、能楽や茶道・武道等の芸道といった種々の文化的事象に広く影響を及ぼした。

こうして広まった禪宗文化に係る世界遺産は、京都の他に2010年に登録された中国の嵩山が挙げられる。嵩山は中国東部の洛陽の近くにある山岳群であり、天地の中心に位置する聖なる山として、古くから仏教、儒教、道教等の宗教的な建造物群が多く作られた。構成資産は8件の寺院等に大きく分かれ、527年に渡来僧菩提達磨が禪宗を創始した少林寺はあくまでその中の細分化された一つということになる。山内には菩提達磨が九年間も座禅し続けたという達磨洞に建てられた初祖庵をはじめ、少林寺の中核をなす学住院内の千仏殿や、歴代の僧たちの墓所・塔林などが点在する[21]。登録基準は(iii)(vi)であり、中華思想を表し、さらに宗教的な影響力も持ったこと（地域における重要性）、中国人にとって神聖な山であり続け、仏教建造物は霊山と共生関係を持ったこと等が登録理由となっている。一方で推薦当初はインドから渡来してきた菩提達磨の影響として(ii)等を取り上げているが、シリアル・ノミネーション全体にその価値はないとして認められなかった。また(vi)についても、推薦時は禪宗の伝播において少林寺が果たした歴史的意義を触れているが、イコモスはその点については言及していない。他方で、少林寺の全体的な構成は、大きな禅寺院のあり方を示すものと見なされ、他の場所の禅寺がそれに続いたと触れてられている[22]。

この点、鎌倉に関しては、評価基準(iv)として、禪宗の「人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式」の価値の他、(ii)その継承の意義、(iii)文化的混交を評価することができると考えられる。

鎌倉の禪宗伽藍・庭園は、狭い縦長の敷地に配置される形で発展し、それに合わせて庭園も門前に置かれるか（円覚寺）、谷戸の崖に沿うように置かれている（建長寺、瑞泉寺）。一方で京都の禪宗伽藍は必ずしも南宋の形式に沿って縦長に配置されたわけではないが、建長寺を模範として多くの伽藍が縦長となっている。中国では尾根を造成して伽藍を造るのに対し、谷を造成して伽藍を造ったため、周囲が見晴らしのきく景観ではなく、岩壁に囲まれ、縦長の建物配置となり、土地の条件から水処理のために伽藍最奥部に池を作る必要があり、方丈奥庭園が造られ、山頂を景観に取り入れるとともに、その山頂を逆に眺望点とした[6]。枯山水庭園の龍門瀑を導入したのは、建長寺を創建

した蘭溪道隆であるという説もあるほど、鎌倉において庭園様式も発展した。

それらが世界遺産の天竜寺や西芳寺にも繋がっていった点を踏まえると、禪宗伽藍配置の過渡期や非整形庭園の発達を示した「人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式」と言える。この点については、不登録勧告後の勧告内容の検証・調査研究結果においても表4の通り述べられている[19]。

表4 勧告内容の検証・調査研究[19]

立地	①中国でも谷あい立地するものもあるが、谷の規模が大きく、建長寺等の鎌倉の狭い谷戸とは大きく異なる、②京都五山等も建長寺の谷戸造成と全く異なる。
造成	①南宋五山等は円覚寺と同様に斜面を雛壇造成している、②国内外で、谷あいの山裾を垂直に切り落とし、直線的な境内を確保する谷戸造成は認められない。
伽藍配置	①中国では主要伽藍が一直線に配置され、それを軸線として左右対称に付属建物群を配置している、②中国では建長寺のように建物奥に曲池を配する庭園は認められない。
建築様式	円覚寺舍利殿は江蘇省・浙江省の北宋から元にかけての時代の建築様式の諸要素を取り入れて成立、②先行する永保寺観音堂や功山寺仏殿などの様式をさらに繊細かつ精巧に技術面・装飾面において進化させた禪宗様建築の典型・完成形。

4 結論

以上から、RQの「鎌倉のOUVはどのようなストーリー等によって再構成できるのか」という問いに対し、結論は、前回の推薦書で取り上げられていた武家文化ではなく、禪宗文化を基軸としたストーリーというものとなる。具体的には、表5のような示し方が考えられる。

当研究の課題は、遺産の保護・活用のあり方、まちづくりのあり方、市民との合意形成プロセス（市民感情）といったものを十分に分析できていない点であると考えている。例えば、鎌倉には鎌倉文化を組織的に調査研究し、成果を展示する機関がなく、鎌倉市民は鎌倉文化に関心は強いものの、意外とその世界史上の意義等の本質的価値を認識していないところがある[4]。また、「武家の都」というストーリーや、武家文化に関連する文化財への固執が強く[23]、バッファゾーンや付随的価値として武家文化に関する文化財を含めるといった登録手法や景観規制の重要性など、世界遺産の考え方への理解も不足している。単に登録されることによる影響の良し悪しを議論するだけでなく、世界遺産への登録のあり方についても議論が必要であ

ると考えられる。

文化遺産を抱える地域の人々は、遺産をできるだけ活用することで、常に自らの歴史や価値観と対話しており、歴史に対して謙虚な姿勢を持っており、文化遺産は醸成された地域独自の規範や価値観を内在している[24]。鎌倉の価値の本質は、鎌倉時代という最盛期の遺産の存在のみならず、時代を通じて信仰の対象としての遺産を残してきたという事実であり、残された遺産、風致、市民の鎌倉への思いといったものを大事に活用していくべきであると考えている。

表5 再構成したストーリー

内容	鎌倉は武家の庇護の下、中世から近世にかけて、禅宗の継承・発展に大きく貢献した場所である。中世には南宋の亡命禅僧を多く受け入れ、専修禅の修行場を設け、山裾に伸びる独特な伽藍配置を形成し、天竜寺・西芳寺の庭園を作庭した夢窓疎石等の修行の場となった。近世まで東日本の禅宗の中心地となった他、縁切寺として女性保護の役割も担った。
構成資産	寿福寺、建長寺、円覚寺、瑞泉寺、東慶寺、浄智寺、海蔵寺、報国寺、妙月院等
評価基準	(ii)中国で発達した禅宗文化を受け入れ、日本独自の形に発展させた軌跡 (iii)鎌倉谷戸の地形に合わせた独自の伽藍配置が行われた他、地形に合わせて、やぐらという空間を形成 (iv)日本禅宗様の建築や日本禅庭の黎明期の姿

謝辞

当研究に文献を通してたくさんの知見をご提供いただいた五味先生、至らない点を色々と指摘していただいたゼミ生の皆様、定年退職後も親身になって相談に乗ってくださり、最後まで温かく見守ってくださった森岡先生、修了後も親身にご指導いただいた北川先生に、感謝申し上げます。

文献

- [1] “World Heritage List”, <https://whc.unesco.org/en/list/> (2023年12月8日参照)
- [2] 西村幸夫, “世界文化遺産の思想”, 東京大学出版会, 2017.
- [3] “世界遺産条約履行のための作業指針” https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai_isan/pdf/93716501_01.pdf/ (2023年12月8日参照)
- [4] 佐藤信, “世界遺産と歴史学”, 山川出版社, 2005.
- [5] 加藤幸治, “文化遺産シェア時代—価値を深掘る“ずらし”の視角”, 社会評論社, 2018.
- [6] 五味文彦, “武家の古都・鎌倉の文化財”, 角川学芸出版, 2011.
- [7] 中世都市研究会, “鎌倉研究の未来”, 山川出版社, 2014.
- [8] 落合知子, “古都鎌倉の文化財保護の現状と課題—世界遺産登録に向けて”, 國學院大學博物館學紀要, Vol.24, pp.51-79, 1999.
- [9] 寺田篤生, “鎌倉の世界遺産登録運動”, 環境社会学研究, Vol.12, pp. 81-85, 2006.
- [10] 神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会, “鎌倉の価値を考える: 世界遺産登録に向けた比較研究から見えたもの”, 神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会, 2020.
- [11] “我が国の推薦資産に係る世界遺産委員会諮問機関による評価結果及び勧告について”, https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/isanbukai/sekaitokubetsu/2_02/pdf/sanko_1.pdf/ (2023年12月8日参照)
- [12] 立原繁, “「武家の古都・鎌倉」における世界遺産不登録までの動向”, 東海大学紀要, Vol.4, pp. 65-76, 2013.
- [13] 高木規矩郎, “どうなる鎌倉世界遺産登録: ユネスコへの推薦: ジャーナリストが見た「武家の古都」”, パレード, 2012.
- [14] 亀井利永子, “講演会「第2回 世界遺産から見た日本」要旨 鎌倉: 本当にHome of the Samuraiだったのか?”, 神田外語大学日本研究所紀要, Vol.6, pp. 90-100, 2014.
- [15] 五味文彦, “武家の古都・鎌倉の文化財”, 角川学芸出版, 2011.
- [16] 伊藤住男, “世界文化遺産登録の「顕著な普遍的価値」証明の論点—先例・石見銀山・平泉・鎌倉の登録申請を中心に—”, 日本建築学会計画系論文集, Vol.80, No.718, pp. 2879-2885, 2015.
- [17] 辻啓佑, “世界遺産登録の戦略的アプローチモデルの検証—平泉の登録をケースとして—”, 大学院研究年報公共政策研究科編, Vol.10, pp. 41-51, 2016.
- [18] 鎌倉市, “世界遺産登録推薦書 (英文)”, 鎌倉市, 2011.
- [19] “文化遺産オンライン 世界遺産”, https://bunka.nii.ac.jp/special_content/world (2023年12月8日参照)
- [20] 伊吹敦, “禅の歴史”, 法蔵館, 2001.
- [21] 藤井勝彦, “中国の世界遺産”, ジェイティビィパブリッシング, 2012.
- [22] “Historic Monuments of Dengfeng in 'The Centre of Heaven and Earth'”, <https://whc.unesco.org/en/list/1305> (2023年12月8日参照)
- [23] 五十嵐敬喜, “平泉から鎌倉へ 鎌倉は世界遺産になれるか?!” , 公人の友社, 2012.
- [24] 世界遺産と地域づくり研究会, “歴史と風土とまちづくり—世界遺産と地域”, ぎょうせい, 1998.